

Part IV. ポピュラーボーカルの歌い方の基本と技術

1. 曲の構成をつかむ

歌を歌うには、歌を覚えなくてははいけません。誰かが歌ったものを聞くと、大体、どのような曲かわかるのですが、できたら、楽譜から学んでいきましょう。

楽譜には、歌の解釈や、歌い方についての決まりとともに、歌い方のヒントがたくさん入っています。そこから、さまざまなことを読みとります。

1. 曲の大まかな構成とテーマ

A A' B A

A B C B C A A

など、同じメロディのところを大きく捉えていくと、曲全体がどのように構成されているのかがわかります。曲が打ち出すテーマが繰り返されている場合もあります。

2. ことばとメロディとサビ

ことばで聴かせたいところ、メロディの美しいところ、サビとして歌いあげたいところも、音の高さや、さまざまな記号からわかります。

3. 間とピーク

ピークとは、曲の盛り上り、一番、気持ちを強く打ち出すところです。それで終わるときもありますが、大体はそこから、おとしたり、ことばの語りにもって来たりします。

間とは、歌わないところ、ブレイクや間奏です。これも表現の一つであり、何もしなくてよいわけではありません。声にしない部分での表現、聴き手とのコミュニケーションを確認する部分でもあります。

4. ことばを読み込む

何度も何度もことばに生命が通うところまで詞を読み込むことです。そこで新しい発見や歌の表現方法、新たな解釈も見つかります。

5. リズムをとる

リズムをとるところから、詞の表現の強さの加減や、感情の入れ方などもわかってきます。リズムの変化するところは、大きなポイントです。

6. メロディ・音程を正しくとる

メロディの同じところ、似ているけれど少し異なるところは、徹底して把握しておくことです。

2. 詞を読む

詞を読むのは、暗記するためではありません。その詞の表現しようとする世界をつきつめ、それをいかに自分の表現スタイルでよりよく活かすのかを突きつめていくためでもあります。

ボーカルが、楽器と最も違うのは、ことばがあるということです。ことばのなかにあるソウルをメロディにのせて伝えるのがボーカルともいえます。ですから、歌うまえに十分に歌を、そして、そのまえに詞を自分の心に感じることです。詞を読みあげるように歌えるボーカルは高い評価を得ています。

次のような順でやってみましょう(録音して聞いてチェックしてみてください)。

1. できるだけはっきりと大きな声で正しく読む(発音、声の大きさ、聞きやすさをチェック)
2. 感情を込め、表現しながら読む(感情が伝わり、表現ができているかをチェック)
3. 全体の構成を考えながら、メリハリをつけて、一つの世界を読みあげる(全体のバランス、構成をチェック)

BGMにその曲のメロディを流して表現するのもよいでしょう。

3. 体から声を出し、声に表情をつける

声のポジションがしっかりととれるようになると、体から呼吸のように声をコントロールできるようになってきます。このときは、自分のなかで最もしぜんで素晴らしい声となり、声の表情もついてきます。体が歌の歌い方を教えてくれるのです。

ですから、メロディにあわせて歌詞を読み込んだり、ことばにあわせてメロディにのせていったりすることで、歌をこなしていきつつ、自分なりのイメージでベストの歌い方をつくっていくことを忘れてはなりません。

ボーカルもルックスがよいのに越たことはないのですが、何よりも声の表情が大切です。声のよし悪しよりも、その人の最もよい声が、聞いている人の心に働きかけるために、どのような表情をしているかということが問われます。

一声、聞くだけで魅了されてしまう歌声、それは必ずしも声のよさや美しさだけではありません。どのように声で音のイメージを表現するかで決まってくるのです。

ですから、自分の好きなボーカル、できたら世界でも一流と認められている人の声とその使い方に多くを学んでください。

声はすぐには化粧できません。少しずつ毎日の地道な努力によってのみ、輝いてくるのです。表情、表現力豊かなボーカルをよく聴くこと、そして、そこから吸収していくこと、これに勝るトレーニングはありません。

ただ、一言、ことわっておきたいのは、プロの体のある人が一見、簡単にやっているようにみえることほど、一般の人(しっかりしたトレーニングをやっていない人)がやるに

は大変であるということです。

プロの体では、小手先でできてしまうことと同じことを、アマチュアはあえて全力でやる期間が必要なのです。全力でやり続けるから体もでき、上達できるのです。小手先だけをまねしても、百害あって一利もありません。

器をつくるのと、器を使うのとは全く違うということです。ブレスボイストレーニングは、まずはギャップを知り、器を大きくしていくトレーニングなのです。

4. アカペラで歌ってチェック

アカペラで歌うと、実力のすべてがチェックできます。歌を聴く耳もよくなります。ですから、ボイストレーニングにおいてはマイクに頼らず、基本的にはアカペラでの練習を旨とするべきでしょう。

音程はピアノで、リズムはリズムボックスなどでチェックするとよいでしょう。アカペラでやるとテンポやリズムが狂う人がとても多いからです。

バンドのステージのなかでは、多くの共演者に助けてもらえるボーカルですが、基本はアカペラです。最低限、一人でアカペラで聞かせられるレベルに仕上げなくては、共演者の足をひっぱることになります。

そこで、いろいろなことがチェックできます。

好きな曲を一曲、アカペラで歌ってチェックしてみてください。

1. 音程
2. リズム
3. ことば
4. 発声
5. メリハリ、歌唱力(表現力)
6. 構成
7. センス
8. ノリ、リズム
9. バランス、パワー
10. オリジナリティ、ポリシー、熱意

特に、語尾でのことばの切り方や、声の伸ばし方などは、アカペラではごまかせません。

リズムやセンスもよくわかります。アカペラで歌えたら、もう何も恐くはないはずです。

5. 歌い出し

歌い出しは誰でもよく聞いてくれます。しかし、同時にあなたのボーカルとしての価値が判断されるところです。ここで魅き込まなくては、歌は成り立ちません。出だして、

一曲、全ての歌い方も実力もほぼ見えます。

歌い出すわけですから、最初のことばはかなりはっきりと打ち出す必要があります。お客の知らない歌なら、何がテーマなのかを理解してもらう必要もあります。

第一声でキョもリズムも決まります。つまり、ここがどうこなせるかが、歌が誕生するかどうかの別れ目なのです。

○歌い出しのトレーニング

6. メリハリをつける

メリハリは、歌のどの箇所でもついています。歌が心地よく聞こえるのは、一つひとつのことばにメリハリがついて、前へ前へとゆらいでいるからです。息を吐いて吸うように、波が押しは引いて返すように、歌もまた、こういうゆらぎの上に乗ったものです。

しかし、ふらついてはよくありません。全体の大きな流れを構築して捉えた上で、メリハリをつけないと、逆効果になってしまういます。どれだけ一つの歌に大きな流れを感じ、つくりあげ表現できるかが、ボーカルの力です。ボーカルがどれだけ、強く大きな命を歌に与えられるかということです。歌うのでなく歌を動かし、人々の心に大きな力を届ける、そんなボーカルを目指して欲しいものです。

ただ、そんなに難しく考えなくとも、強く出したら、引くし、大きく出したら小さく出すし、高く歌い上げたら、低くおとすといった、相反する組み合わせをつかんでいけばよいのです。それを歌のなかでうまく動かしていくことです。センスと慣れが問われます。

○メリハリのトレーニング

7. サビで盛り上げる

サビとは、曲のなかで最も盛り上がる場所です。大体、高い音域になっているのですぐにわかります。

伴奏も、ここぞとばかりに盛り上がりますので、ボーカルの声がかたく抜けてこないときもあるようですが、これは、ボーカルの力不足です。こういうときはバンドの音量を調節すべきです。

サビを本当にしっかりと歌えるボーカル(その人の高音域にあたる場所の発声が正しくできているということ)は、本当に少ないようです。大体はのどをしめたり、上のひびきに逃げています。そこで人をぐいっとひきつけ、捉えて離さないような表現には至っていません。力の差が一番はっきりと出るところです。

サビを盛り上げるには、そのまゝで、ややヴォリュームをダウンさせておくとよいときもあります。構成上で、サビを演出するのです。

○サビのトレーニング

Column シャウト

日本人のボーカル力不足は、一言でいうと、深いポジションをもたなくてはできないシャウトが使えないためです。多くの人が、のどでシャウトしているため、のどを痛めたり、不安定な発声となっています。

これには、中音域までのトレーニングを徹底してやり、体と息を鍛えるところから、やり直さないと、根本的な解決になりません。高音域の問題は、高音域で解決しようとしても難しく、もっとわかりやすく直しやすい低・中音域で厳しくチェックしておくことです。

サビになって、ヴォリュームダウンさせないためには、中音域で頭声のひびきに頼らせないことです。上のドーソあたりをサビにするなら、上のドまでは音質を変えず、ひびきのバランスも胸を中心にとっておくことです。すると、ハイトーンになったときに、輝く声が出て、サビらしくなるのです。

多くの方は、中音域ですでに頭声に頼りすぎています。そのため高音域に入る前にヴォリュームダウンしているから盛り上がりようがないのです。

8. エンディング

終わりよければすべてよし、これは歌にもあてはまります。エンディングでの見事さで拍手の大きさは決まるといってもよいでしょう。逆にエンディングを失敗するとみじめです。多くの曲は、サビで盛り上がったあと、少し落として余韻を残して終わります。もちろん、なかにはサビのまま、終わるものもあります。

どちらにせよ、エンディングは力の差が表われるところです。ピタッと確実に決めることができるには、やはり基本の力がいります。

慣れていない人は、やたらと伸ばしがちですが、伸ばすということは、とても難しいことです。パッと切る方が効果的なときが多いものです。特に初心者にはエンディングに関わらず、全体的に声をひっぱって伸ばさないとスパスパと切っていく歌い方をお勧めします。

マイクのあるときは、少し遠ざけていとしげんとF. O(フェイドアウト…少しずつ音が小さくなる)がかかります。エンディングでのマイクの使い方、ポーズは一考を要します。

Column

ブレスボイストレーニングでは、最初は役者さんのようになることを目標としています。歌えるまえに声をせりふで使えるようにするということです。

役者さんは、声に関してはトレーニングをつんでいますから、ことばでたたみかけてうたうのはうまいのです。シャンソンなどは、せりふの味が問われるので、彼らに向いています。しかし、そういう人でも声を伸ばして使うと荒がみえるので、私は最初はお腹で短く切って歌うように指導します。逆にいうなら、伸ばして聞かせることができるのは、ボーカルならではの高度の技術といえましょう。

○エンディングのトレーニング

9. ひびき

歌は、声を共鳴によってパワーアップさせ、声域、声量とも広げていかななくてはなりません。この共鳴をひびきといいます。ひびきは、どうでもひびけばよいものではありません。やはり、完全にボーカルのコントロールのもとにおかなくてはいけないのです。

特にポピュラーのひびきは声楽と違い、声そのものの効率的な発声だけを考えていてもできないいろいろなひびきがあります。ハスキーボイスなども、その一つです。

しかし、共通しているのは、安定していて、ボーカルが自由にひびきを増域できるということです。これはビブラートにも共通します。さらに、フレーズのなかにうまくはまっておき、方向がしっかりと定まっていることも、必要です。

私は息が通っていれば声がかすれても歌は、生きてるといっています。

Column ひびきと息とのミックス

声楽は息だけでは歌えませんが、ポピュラーはマイクのおかげでかなり息が出ていても通用します。アナウンサーなどはマイクに息が入るとノイズとなるので、息声(氣息音)を使えないのですが、ボーカルは表現のなかでは、声をどう使おうと、許されます。

ヴォーカリストのスタイルとして、ひびきに重きをおいて、やわらかく歌っている人も少なくありません。こういう人は、表面的には声量がなく、口先だけで歌っているように思えますが、少なくとも私たちが考える以上に、安定した声のポジションをもっているから、それができるのです。常に確実に全ての声域にわたってうまく声をひびきにミックスさせて出せるも、高度の技術なのです。

ブレスボイストレーニングにおいては、ひびきは、体から声が出るようになったときに、余計な力を抜きリラックスできればしぜんとして出てくるとしています。なぜなら、のどをリラックスさせて声を出すことができるようになると、胸にまとめた声(ひびき)がしぜんと頭部にひびいてくるからです。

あとは、そのひびきをコントロールすればよいのです。歌に必要とされる表現のスタイルによって、ひびきのバランスを自分で決めていけばよいのです。

安易に、頭にひびかせるトレーニングは、一見早いようでいつまでも身につかないことが多いようです。

私は、高い音は頭声、低い音は胸声という考えよりも、どちらも体で声を出し、歌の内容や表現したいものによってひびきのバランスを決めるとよいと思っています。

高い音をシャウトするときに、上にあまりひびかせたくないこともあるし、低く語る時にはやわらかくひびかせたいことも多いからです。

(ナツメ社「ロックボーカル入門」)